

南方（フィリピン）

武漢・コレヒドール攻略と比島敗退を体験し

京都府 小谷輝夫

―小谷さんは、支那事変で漢口攻略戦、太平洋戦争ではフィリピンのコレヒドール要塞を特殊砲で攻撃。その後、比島に残って第四航空軍司令部で悲惨な体験をされておるようですが、本日はこの三つにポイントをおいてお伺いいたします。先ず何年に何処へ入隊されたのですか。

私は大正七年生まれで、昭和十三年三月、東京青山の歩兵第一連隊へ第一補充兵で召集されました。一期

の教育を終えて六月に広島県の宇品港から中支の南京へ、そこから五十キロもありましたか江蘇省の句容に着きました。第十五師団（祭兵団）歩兵第五十一連隊の第三機関銃中隊へ編入され、私は九二式重機関銃の射手となつたのです。そこで討伐、戦闘に参加しましたが、支那事変勃発から一カ年余、南京攻略から半年余ですから、占領地は点だけで面ではない、そのため付近は残敵も多く、戦闘も度々でした。

―それからが武漢攻略ですか。

私達の師団はどちらかというところ、攻略戦の主役ではなかったが、私達は参加しました。その間随分歩きまわした。武昌や漢口が攻略されたのは昭和十三年十月の下旬だったと思います。

私は重機関銃ですから、馬に馱載するのです。馬は

可愛いものです。馬が涙をポロポロ流して泣く、私は随分可愛がったから。馬と一緒に寝た。冬は穴を掘って寝て、馬が穴の上で寝るから助かった。一般小銃中隊では冬期に凍死した者もいた。

私は作戦途中、栄養失調で夜盲症になったので、夜一人で歩けない。それでも馬に縄をつけて引つ張ってもらって助かった。クリークに何回落ちたかわからないが、その度に馬に引つ張り揚げてもらったが、夜行軍はとくにつらかった。長期間の行軍、戦闘などで、服はポロポロ、乞食同様の姿でした。

武漢が陥落してから南京へ戻り、句容県の原警備地区に戻ったのですが、夜盲症のうえマラリヤを患ったので南京の陸軍病院に入院させられたのです。夜盲症は特別食で癒ったがマラリヤが治癒しないので一カ年ぐらいの入院生活でした。食事がとれないので一番瘦せた時は体重が三十二キロぐらいになってしまいました。二十何キロも減ったのですから、骨と皮だけでしたが、昭和十五年原隊復帰し、十二月に東京の歩兵第一連隊補充隊で召集解除になったわけですから、在支

二カ年半です。

―その後、大東亜戦近しということで、横須賀重砲兵連隊に再召集になったと聞きましたが。

昭和十六年四月、横須賀重砲兵連隊（「横重」）へ召集されたのです。ですから家にいたのは三カ月余でした。今思うと、再召集から復員までの四年数カ月はフイリピン戦線というのですから、良くぞ生きて帰れたものだ。

話は戻りますが、私みたいな体力が回復していない者が何故重砲兵になったか不思議でした。しかし、体力がない者がほかにもいっぱい来ているので余り苦にはなりません。それに私同様の古参兵が多く、初年兵はいませんでした。

「横重」ではロケット砲の教育を受けた。その砲はドイツから潜水艦で持って来たというもので、「横重」に二門、他の部隊に三門あったと聞いたが、何処だかは判らない。とにかく五門来ているという話でした。

口径が戦艦「陸奥」の主砲と同じといったから四〇センチ、一抱えぐらいあった。台の上に短い砲身があ

り、長さは六〇センチぐらいか、そこへ砲弾をかぶせる。砲弾の下には翼が着いている部分があり、砲身に砲弾そのものをはめ込む。捻子になってるので三人ぐらいで廻しながら、さらにその上に信管が着いた弾丸の頭部を捻子ではめ込む。すると、全長は人間の身長ぐらい、だから戦艦の砲弾と同じぐらいの大きさというわけです。

台の鉄板につけた砲身には電線がつけてあり、スイッチを入れると砲弾は飛んでいくのです。

射程は八百メートルぐらいしかないが、トーチカ攻撃専用の砲で、当ると大きな穴があいて、トーチカそのものが引っくり返ってしまう。砲弾が大きいので威力は大きい。しかし、弾丸が重いから余り飛ばない。

私は、この秘密ロケット砲隊員で、編成も何も軍事秘密というか、誰にも知らせられていない。そのお陰で、「横重」応召以後のことは私の兵籍には何も書いてない。少数の特殊部隊だから戦友もバラバラで戦後誰にも会えないわけです。しかし、コレヒドール戦で、敵は要塞砲を直射してくる。砲弾はゴーツといって

いる。凄いい攻防戦でしたよ。五カ月間に及ぶ戦闘でしたから。

—そのロケット砲は、コレヒドール要塞攻略に使ったのですか。フィリピンの戦闘でマニラは早く陥落したが、バターン攻略には随分日数がかかったようですね。

この砲は、バターン半島、コレヒドールで使用した。実際には十発ぐらい射ちました。本間軍司令官の前でやった。威力はあるけれども、射程距離が短いので、敵に接近する前に味方がやられてしまう。結局、こちらの損害が多いからと、軍司令官から禁止の命令が出ました。

実際に司令官の前で射ったが、弾がゆっくり、ファ—といった感じで飛んで行く。その時は弾丸がトーチカの前に落ち、二階建てぐらいの穴があいてトーチカは引っくり返って、その穴へ落ちた。だから威力は凄かったが距離が飛ばなかった。

※戦史年表によると、昭和十七年一月二日、マニラ占領とあり、一月二十九日、大本営は、コレヒド

ール要塞攻略のため独立重砲兵第二中隊を内地から、転進途中の重砲兵第一連隊を、指揮下に入れる、など準備をしていた。二月八日、バターン半島攻撃中止、兵力・態勢整理・増援兵力到着後、後図を策する。

二月十三日、バターン半島封鎖下令。

四月三日、バターン半島第二次総攻撃開始。

四月九日、バターン半島の米比軍降伏。

五月七日、コレヒドール島占領、米極東軍司令官

無条件降伏。

(二月マッカーサー司令官比島脱出)

ーロケット砲のことですが、陸軍の兵器にも終戦前の昭和十九年、四式噴進砲というのがあり、本土防衛軍には装備をした噴進砲隊が編成表にあります。これが日本製ロケット砲だったのですかね。口径は二十センチと四十センチとあります。四十七センチ砲の砲身は三・二メートル、射程三千七百メートルと記されています。あるいは、ドイツのロケット砲を研究改造したものでしょうかね。

ー砲はさておいて、バターン陥落後はどうされましたか。

例の戦後問題になったバターンのいわゆる死の行軍ですが、私は二回ほど捕虜輸送に同行しました。日本軍が十五人ぐらいで捕虜を五百人ぐらい連れていく。日本軍には降伏は無いから、こんなに沢山の捕虜が出て来たのでかえってびつくりした。というのが実感ではないですか。

だいいち受入態勢も何も無い。我々だって自分の飲み水も食糧も無いのです。捕虜もひどいがこちらだってひどい。我々も水筒一本ぐらいしか水が無いのだから、こちらでも飲まず食わずだった。それにマラリアが多くて捕虜がバタバタ倒れた。車が無いのだから我々も歩くより仕方がない。水・食糧・マラリアの三つの苦しみ、捕虜ばかりではなく、日本軍も同じだった。

このために本間中将は責任をとられ死刑になった。これに関係した者は戦犯になったようだ。私はその後、召集解除となり、比島の第四航空軍経理部の嘱託として昭和二十一年までいたが、バターン攻略に参加して

戦った人はどうなったか判らない。

私は知らなかったが、軍隊手帳は終戦で第四航空軍で焼かれたというのです。私はあるいはそれで戦犯にならなかつたのかなと思うこともある。しかし、死の行軍というが、特別に虐待はしていない。こちらも水・食糧はなくマラリアでフラフラだった。捕虜は何処かの飛行場の格納庫へ収容した。私等は輸送警備だけだったので、その後彼等のことは知らないが、勝者の判断で敗者が裁かれて、個人の責任は無くても、あるいは無実の罪でも多くの戦犯者が処刑されたことは不幸なことです。

― 現地でも第四航空軍に勤務されたのですが昭和十九年ころからのフィリピンは大変だったでしょう。とにかく、軍人・軍属の戦没者は五十万人近かつたし、在留邦人の犠牲者も多かつたわけですから。末期の状況をお話下さい。

第四航空軍司令部は初めは仏印にあつたよう、私はマニラ支部で勤務していました。十九年ぐらゐから空襲はひどくなり、レイテは陥ち、続いて米軍はルソ

ン島に上陸してマニラへ侵入してきたのです。我々司令部はツゲラオへということで、幾つもの山を越えていったので今は何処だったか記憶にない。道路には人が一杯倒れていました。看護婦・在留邦人の女子が多かつた。死にかけているのだが、自分自身も体力も無くなり、助けることも出来ない、みじめなものだった。昼はP 38やグラマン戦闘機が海上から来て、機銃掃射や爆撃をする。夜は落下傘爆弾です、ファファと落ちてきて何処で破裂するかわからない。馬が落下傘の紐を引っかけると、ポカンと破裂して馬も飛ばされるほどで、威力は相当あるが、爆弾の大きさは判らなかつた。

第四航空軍は航空機もない。編成も指揮系統も何もなくバラバラでみじめなものです。他の部隊も同様で、皆の後をついていったらツゲラオに行ってしまった。もうその時は終戦前で、米軍に全部包囲されていたわけです。

― 終戦は何時知つたのですか、終戦後の状況はどうでしたか。

終戦は全然知らなかった。包囲されているからだが、日本が負けたというピラが撒かれてきて知ったが、誰も本当にしなかった。負けるとは思っていなかったから。

ツゲラオの人たちは、何処の部隊の者が判らないが、自然に固まっていた。もちろん指揮系統はない。だが、食料（乾パン・缶詰？）の配給を取りにいった。飯は炊けない、煙が出れば所在が判り攻撃されるから。壕の中でヒソソリ隠れていた。缶詰の中にはアメリカのがあったから、あちらのを奪ったのでしょうか。

ツゲラオには相当の人数がいたので、米軍も入って来なかったでしょう。その中には将官もいたが指揮系統がないのだから命令がきかない。集団で生きていくようなものだ。我々は航空機銃を持っていたが重いので途中で捨てたので兵器は全然ない。指揮系統もなく武器も持たぬ軍隊とはみじめなものだ。

その後、ピラで終戦が本当であることを知って捕虜になってマニラへ輸送されたが、一緒の人は何処の誰だか判らぬ。皆バラバラでした。収容所は大きな建物

でした。

昭和二十一年三月ころか、鹿児島に上陸、当時私は一人者だったし、指揮系統も無いから復員式も何も無い。何時の間に解除になったかさっぱり判らぬのだから、その日が何月何日も判らない。ただ五百円貰って汽車に乗って東京に帰ったわけです。

私の家は牛込区（新宿区）中野町四八で、幸いに家の近所三丁四軒だけが焼けずに残っていた。父や兄弟がいて「よく生きていたなあ」と抱き合ったことを今だに覚えています。家族は私は死んでしまったと思っていたという。

それから戦後生活ですが「バターンの捕虜輸送した者は戦犯だ」という噂が耳に入って来たので、区役所へ復員の届をしなかった。軍隊手帳が第四航空軍で焼却されたということ知らなかったから毎日が不安でした。米軍のMP（憲兵）が来ると「ドキドキ」でした。

大分、後になってから戦犯解除になったと知って東京都庁民生局へ届けたら、軍歴資料は一切ないという

ことで、厚生省にもない。そんなことで、軍歴十二年以上あっても恩欠者というわけです。

今の私を形成した

ミンダナオの戦場

熊本県 稲田 勇

―稲田さんは、青少年へ贈る言葉「わが人生論」という書物に「苦勞の尊さを考えよう」という文を書かれています。その中で「私たちは戦争中という特殊な情況の中で成人した。そのころの若者には青春という言葉は知ることなく過ごしてしまつたように思う。決して幸せな時代ではなかつた。しかし強い精神力や忍耐力は今の若者に足りないものを学び得たように思う。…」朝鮮から比島のミンダナオ島を転戦、終戦まで悪戦苦闘の末、二十年暮復員した。ぼろぼろの服にはだしの「乞食」同然の姿で横須賀に上陸した。…」とあ

ります。

復員後御苦勞を重ね彫刻家として名をなされ、「彫刻の仕事に取り組み、はや四十年、すでに老年期を迎えた今なお彫刻家を志した時と同じ心情で製作に取り組んでいる。今後生ある限り芸術としての彫刻に向かつて挑戦して行きたい。」と結んでおられますが、その力の原点ともいふべき戦争のご苦勞をうかがいます。先ず、何年徴集で、朝鮮へ何時行かれましたか。

私は大正十一年一月二十三日生れ、昭和十七年徴集で、十八年三月一日、熊本市内の西部第二十四部隊（輜重兵）へ入隊、一期の検閲後、暫く本部にいて釜山から平壤へ。第五十部隊という新設部隊で草ぼうぼうの所でした。そこは第三十師団（約一万二千三十二部隊）私は第三中隊に編入、自動車部隊です。（第一・二中隊は輓馬部隊）。

朝鮮には一年ぐらいいたのです。わが部隊は、はじめは満州の要員部隊のようでしたが、釜山からフィリピンへ出港したのです。輸送船には自動車を組み立て